



お江戸舟遊び瓦版 1074号

水彩都市江東 ころろ美しい日本の再生 安全・安心まちづくり

お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会 江東区千田 13-10

長谷川如是閑 「ある心の自叙伝（1）」 講談社学術文庫 84. 5. 10
序説 胎児時代

- 少年時代に、個人主義、自由主義の空気の家に育ち、内外の先輩の書物や話に教えられたせいか、無数の凡人が絶対力を持つ時代、今こそボウフラよ立てという思いで、ボウフラの自叙伝を書いてみようと思う。
- 日本の封建末期の都会市民は、封建の枠内で肥え太った町人だったので、武力と政治力の必然関係が有力に働いていた時代の子供だった。
- 封建町人の子孫の私にはその血が流れ、何事も客観視する性質だった。江戸っ子は歴史の当面に立つことを避け批判的な白眼で時代をにらんでいるにとどまり、明治時代に幅を利かしていたのは田舎者ばかりだった。江戸っ子で世に聞こえていた者はインテリと小説家だけだった。
- 近代イギリスの歴史は、平和革命の標本だが、それにはイギリス人特有のユーモアが多分に与っていた。イギリスの市民社会は、フランス人が旧政治の破壊に血を流す以前に、立憲国家の基礎を獲得し無血革命に成功している。



私の生まれた頃の時代

- あの**大正デモクラシー時代**が、やがて**昭和の反動時代**に逆転した歴史は、半世紀余り前の私の生まれた頃の、明治10年～20年代にわたる時代の**歴史の繰り返し**だった。何分にも維新後急速度で近代化へ突進した日本も、世界史的波動の**東洋への波及**に怯えて反動へ逆コースを取り出した。
- 大正時代には、先進諸国家の市民政治は**袋路**に入り、悠々と遅ればせの**帝国主義時代**へ進んでいったのである。維新直後日本は世界の**近代化の段階**を一度に飛び上がった。日本の天皇は専制君主国家を取り戻したのではなく、実権は少数の**封建国家の会盟**（薩長土の連盟の意）にあり、封建国家の**中心勢力の移動**に過ぎなく、徳川側が自ら弱体化を認めた**恭順政策**のお陰だった。
- 武力的帝国主義時代**の階段を昇りつめた世界史は、領土主義時代から**交易主義時代**に移って、**新しい開拓地**を極東に見出したのだったが、極東の未開国は前世紀の段階にも達していなかった。中国は、恐怖心のみが働いて、**武力も文明力も不足**していたので、**ゲリラ式反抗**を繰り返した。
- 私の生まれた木場**は、江戸で消費される材木はそこで賄われる材木問屋の街で、江戸から東京への移り変わりを、どこ吹く風と**知らぬ顔の区域**だった。大正になり昭和になり、特に大震後は変わり果てた姿になってしまったが、今の人には**封建時代の残像**を与えるものと見えていた。
- その材木屋の一つが私の家であった。私の家は、山から流されてきたままの大きい角材専門だったので何十軒もの家が建つ柱になるほどの材木を連ねた、塀に囲まれた角店だった。江戸の初めに**三河**から出て、**代々神田**に住まい**幕府の棟梁の家**だった。私の父は、生一本の商法で、相当余財もできたので、そのまま終わるのを歯がゆく感じ出していた。

私のこども時代

- 私の**曾祖母**は、加賀出身で、早く江戸に出て結婚し、夫と死に別れ、女手一つで祖母を育て私の祖父に嫁がせ、80を超えるまで一人暮らしを続け、維新後父が木場に店を作った時に、そこに移って「奥のお婆さん」と呼ばれた**隠居の身**であった。昔は**女の酒を飲むのは当たり前**で、祖母は度外れの酒飲みで、一升酒を飲むのだった。私は中学時代から晩食後はその**話相手**だった。
- おかしいことには、武家でも町家でも、貧乏な家でも、女という女は**遊芸の一つぐらい**は心得ていない者はなかった時代なのに、曾祖母と祖母は**三味線ひとついじったこと**もないようだった。
- 私の生まれた明治8年、浅草本願寺で、**地方長官会議**が開かれ、**明治天皇**が「漸次これを拡充

し、全国人民の代議員を招集し、公議与論をもって律令を定め」云々「故にまず地方長官を招集し、人民に代わって協同公議せしむ」という勅語を賜った。そして国会開設運動が熾烈になった。

小学校時代

- ・ 明治の人たちが、日本近代化に、何をおいても教育と気づいたのは当然で、その学制の規模も大きかった。明治の初めは事務官僚でも、みな政治家をもって任じていたもので、犬養毅や尾崎行雄等が、新聞記者から官僚になったのも転落したわけではなかった。学制立案者の大木喬任は、大風呂敷で小学校 5 万を提案し、翌年には 12558 に達し、就学率も 28% に跳ね上がった。一世紀先を見越した計画だったが、一般が革新の意気に燃えていたからだった。
- ・ 明治学校で、私より 2 年前に兄が下谷の本島学校という私立に転じ、私も 2 年時に転向させられたが、明治学校の堂々たる洋館に反して見すばらしい平屋の歴史的な寺子屋に転じた。

逍遥塾時代

- ・ 封建時代の古い体制が崩れて、家も社会も人間陶冶の場ではなくなり、親も旦那も親方もいかに近代人を育てていいのか見当がつかなくなって、むしろ国家任せにするしかなくなった明治時代には、もはや子弟には「他人の飯を食わせる」意味はなくなったのである。
- ・ 私は 10 歳で特別の関係で坪内逍遥先生の塾に入れられた。逍遥塾は根津の遊郭に近かったのだが、遊郭は深川の洲崎に迫りやられた。塾には有名人も多く、予備門の生徒が私の面倒をよく見てくれた。逍遥も英文学の教養をもって立ち上がり、イデオロギーは進歩的だったが、芸術的感覚は保守的だった。
- ・ 明治 20 年代初めに演芸矯風会がつくられ、劇や音曲の台本から「無学」と「猥雑」を排除すると、メロドラマ的時代劇から、史実にもとづく歴史劇に進む運動が、「活歴」と呼ばれた。

中学時代

- ・ 私が ABC を教わったのは敬宇中村正直先生の同人社だった。先生は 3 歳ころに四書五経の素読を了えた神童だったが、慶応の初めに幕府からイギリス留学を命ぜられ、維新後は明治政府に仕え、明治 10 年ごろに東京大学教授になり、私の同人社に入ったころは元老院議員だった。福沢と同様進歩主義の先覚者と言われたが、学問では福沢以上の名があった。明治 6 年に福沢や森有礼や西周らと明六社を組織して、当時最も有力な指導的勢力を持った先端的文化人グループだった。
- ・ 私は、神田と並んで江戸趣味の根拠地と言われた深川に生まれて、「山の手」環境に投げ込まれたが、今度は、深川から江戸趣味の本場の浅草に戻され、神田淡路町の共立学校（今の開成中学）に転じた。私の家に入出入りしていた二代目の新門辰五郎は出入りの鳶頭で、浅草切っつの顔役だった。その父の初代辰五郎は江戸の火消しの「す」組の頭の跡継ぎだったが、火事場で 18 人を殺してしまい、八丈島に流されたが、やがて許され、一躍江戸中の火消しから「浅草の頭」と立てられ、維新の際には慶喜公について幾度か命掛けの仕事をして明治 8 年に死んでいる。
- ・ 後年、漱石の『猫』は単行本になって大いに評判になって読んだのだが、当時は、高級のインテリ群を取り扱いながら、漱石の態度が、私の少年のころに愛読した戯作者の『浮世風呂』の三馬、『膝栗毛』の一九等の近代的インテリの踏襲なので好感を持った。しかし、漱石の『琴のそら音』はその気品に反感を持ったが、今ではすっかり漱石が好きになっている。
- ・ 私は 6 歳で小学校に入って、12 歳で中学程度の学校に入って、19 歳まで足掛け 8 年の長い中学生時代を過ごした。たびたび学校を変えた上に、時々病気で休んだりしたのでだいぶ余計な時間を費やしたが、おかげで時代と組織の様々に異なった学校生活を経験し、損したとは思わない。
- ・ その頃の中学生には制服などはなく、先生も生徒も、ともに年齢も格好も、また教育の内容もてんでばらばらだった。型も何もない「人間」先生と生徒が、年齢の違いだけで、初歩的の人間内容を、先に生まれたものが後から生まれたものにくれてやっているというような教育だった。
与えるもの、与えられるものが、知識であるか、感覚であるか、情操であるか、形であるか、性格であるか、先生も生徒もそれを知らない。そんなものをすべて人間内容として受け渡しているのだった。そんな時代をやってきた私が、近代国家化が進み急に整頓され、幸福になったか。